

運命の日

本山 薫

(別府市美術館学芸員)

あの日の朝、十分余裕を持ってホテルを出たはずだったが、道を尋ねた年配の女性に「歩いて行くの？ちょっと遠いんじゃないかねー」と言われた。前日に別府大学を下見しなかったのがいけなかった。あせった私はホテルにかけ戻り、タクシーを呼んでもらって別府大学の正門まで飛ばして来た。教室に入ると、スーツに身を包んだ人たちがすでに大勢着席していた。みんな頭が良さそうに見えた。そして席についた私を一層不安にさせたのは、聞こえてきた話し声だった。

当時、他大学に在籍していた私は、寮で偶然、大分出身の後輩と同室だったことがあった。彼女がノビをしながら「真剣疲れた」と言っているのを初めて聞いたとき、「なんで『真剣』に疲れるの？」と不審に思った。「よだきー」にいたっては、意味不明の叫び声にしか聞こえなかった。そんなことを思い出しながら、こんなことなら彼女に大分弁を習っておけばよかったと後悔した。

しばらくとぎれとぎれに聞こえてくる話し声をなんとか理解しようと真剣に耳をすませていたが、ふと話している人たちの受験票の色が違うことに気が付いた。私は、前後左右、斜め前を韓国人留学生たちに囲まれていたのだった。

さて小論文の時間になった。ポイントは予備校の小論文試験で高得点を取ったという妹に電話で伝授してもらった。問題文の中に「文学も可」の文字を見つけたとき、当時、英文学を学んでいた私は、「これしかないっ！」と思った。すぐにD. H. ロレンスの『息子と恋人たち』(Sons and Lovers) がひらめいた。他大学から教えに来ている先生が「女子大でこんなのを教えていいのかなー」とぶつぶつ言いながら講読した作品だった。この作品中には、月夜の晩に夫とけんかし、外に締め出された女性が、庭に咲いている白百合の香りを嗅ぎ、その花粉が顔に付くという場面がある。これは、性的な意味を持つと同時に、彼女が主人公ポールを身ごもるという受胎告知を暗示する場面と言われる。この作品によって私は、ロレンスにとって性こそが生の根源力であるということを知り、彼の他の作品を理解することができた。以上のようなことを必死で書いた。ただし、受胎告知が西洋絵画の重要な主題のひとつであることを知ったのはずっと後のことである。

ずいぶん長く待った後に面接が始まった。これは前日、ホテルの部屋の鏡に向かって密かに練習していた。お辞儀の角度を確認し、質問事項を想定し、その答えを書き、声に出して読み、面接官に好印象を与えるために笑顔の練習までしてしまった。「備えあれば憂いなし」である。

それでもやはり本番は緊張した。順番を待っている間、両隣りを留学生にはさまれた私は、「アナタハドコカラ来マシタカ？日本語大丈夫デスカ？」と聞かれた。「私ハ日本人デス。日本ノ長崎カラ来マシタ。」と自信を持って返答したが、私の真正面には、やたらとにぎやかに話す日本人の一団が座っていたので、先程の教室での席順といい、面接を待つこの順番といい、私はもしかして留学生と間違われているのかもしれないとまた不安になった。そしてついに私の番がやって来た。動機だけは練習通り、「ギリシャのクーロスとコレー像が次第に自然な丸みを帯びた人間の姿に変化していく様子を西洋文化史の授業時にスライドで見ても感動し、…」と言えたが、微笑む余裕は最後までなかった。こうして何とか無事にすべてを終え、緊張と不安に満ちた試験会場を後にした。

現在、幸運にも美術関係の仕事に携わっている私にとって、別府大学の編入学試験の日は私の運命を決めた日であり、美学美術史学科理論コース(当時)で学び、大学院で研究した日々はこれまでで最も充実した濃厚な時間だった。私にチャンスを与え、教え導いてくださった諸先生方、刺激を与えてくれた友人たち、理解してくれた両親、励ましてくれた祖父母、そしてたまには役に立つ妹たちに心から感謝している。